

児童図書に対する司書の感性評価に関する検討 -読書ナビゲーションのための基礎的研究-

Study of Librarian's Mood State Evaluation to Child Books: Fundamental Study for Navigation System of Child Book Selection

○中山伸一, 石塚英弘(筑波大院図情メディア), 土居安子, 遠藤純((財)大阪国際児童文学館),
関畑宏行, 本間聡((株)富士通東北システムズ)

1. はじめに

児童・生徒の読書行動を支援するため、我々は児童・生徒が楽しみながら種々のアプローチにより図書を探す事ができる読書ナビゲーションシステムの開発を行っている。そのアプローチの一つとして読後感情による検索方式を考えているが、ここでは検索方式を決定するための基礎的研究として、司書の児童書に対する読後感情調査を行ったのでその結果を報告する。

2. 児童向けの感情による図書検索における問題

我々は、多面的感情状態尺度を用いた小説の読後感情調査に基づく「感情による図書検索システム」を作成したが、児童図書についてはいくつかの問題があると考えた。すなわち、(1) 児童・生徒が容易に理解し得る感情であるのかどうかと言う事と、(2) 児童・生徒の読後感情評価の妥当性をどのように評価するかという点である。

児童が理解できる感情について検討するため、まず大阪国際児童文学館が提供している「本の海大冒険」で児童が書いた図書のおすすめの文章510件から単語を抽出し、それらを多面的感情状態尺度に対応する感情に分類して出現状況を調べた。その結果、倦怠に関する単語は無いことが分かった。また敵意については出現状況も少なく児童・生徒の検索要求としても相応しくないと考えた。さらに、驚愕については驚きと恐怖の2種類があることが分かった。

表1 多面的感情状態尺度の感情に対する特徴的な言葉

多面的感情 状態尺度	抑鬱・ 不安	敵意	倦怠	活動的 快	非活動 的快	親和	集中	驚愕	
特徴的な言 葉	悲しい			楽しい	やすら ぐ	親しみ がある	一生懸命・ 真剣な	びっくり・ 驚いた	どきどき・ 怖い

これらを児童・生徒向けの感情による検索システムに用いるにはまだ多様である。そこで多様なタイプの児童図書に対して上記の項目の感じる強さを評価し、児童図書に特徴的な感情を抽出する事を考えた。

3. 児童向け図書の感情傾向と評価の差異

司書に100冊の児童書を上述の感情毎に5段階で評価してもらった。評価は4名で行い、1冊当たり2名の評価値が得られるよう分担した。全評価値を主成分分析にかけた結果、累積負荷量72%で3つの主成分が抽出された。第1主成分は悲しい-楽しい/どきどき・怖い、第2主成分はびっくり-やすらぐ、第3主成分は親しみがあるという軸であった。

児童・生徒の読後感情評価の妥当性は完全に保証できないので、図書館司書の評価を客観的な指標として用いることを考えている。そこで司書が付与した感情状態の評価値の妥当性を見るため、それぞれの児童書に対する2名の評価値の差異についてまとめた。

表2

特徴的な言葉	悲しい	楽しい	やすら ぐ	親しみが ある	一生懸命・ 真剣な	びっくり・ 驚いた	どきどき・怖い
差の総和	81	63	87	92	73	66	100
差が1以内の数	77	89	80	83	88	91	70
差が3以上の数	13	1	3	5	3	2	14

この結果、活動的快(楽しい)と驚愕(びっくり・驚いた)、集中(一生懸命・真剣な)は評価の類似性が高く、驚愕(どきどき・怖い)と抑鬱・不安(悲しい)は特定の図書で評価に大きな差がみられ、親和(親しみがある)と非活動的快(やすらぐ)は全般的に評価に若干の差がある事が分かった。

4. まとめ

本研究の結果、読後感情の司書による主観的な評価は感情によって若干差があり、司書による評価を検索システムに組み込む際には、何らかの工夫が必要であることが分かった。また、児童・生徒用の検索の際に妥当そうな感情を絞り込む指標が得られた。なお、本研究の実施にあたってご協力いただいた司書の方に厚くお礼を申し上げる。